

文学部 教授 中西康裕

研究課題 日本古代国家の継受と展開

研究機関 2014年4月1日～2015年3月31日

研究成果概要

日本古代国家の継受とした場合、二つの継受がある。一つは、中国（隋・唐など）や朝鮮諸国（百済・新羅・高句麗・加羅など）の列島外からの継受である。もう一つは、列島内での継受であり、これには、①今まで行われてきた「モノ」を継受する時と、②中央の権力が列島内他地域の「モノ」を継受する時が想定できる。前者の代表例は、7世紀半ば以降統治原理の中心となった律令であり、また人々の生活を変貌させた仏教である。後者の①はいわゆる「伝統」である。②は例えば即位儀礼における出雲国造の神賀詞奏上や隼人舞などがある。いずれもケースであっても、「改変」「修正」といった展開があり、「そのまま」で推移していくわけではない。

3つの小テーマで上記を研究した。

#### 1. 避諱

避諱とは尊貴な人物の名前の漢字を人名や地名などでの使用を控える（避ける）ことで、中国では古くから一般的に行われてきた儀礼・謙譲である。日本でこの避諱の儀礼が何時伝わったかは明快ではないが、『日本書紀』にはその思想がうかがえ、8世紀前半には2例改字が行われている。避諱が一般化するのには8世紀半ばの藤原仲麻呂政権の時であり、その後しばしば改字例が出てくる。仲麻呂以降、日本でも広まったと捉えられている。

古代豪族の阿倍氏は平安時代には安倍と表記を変えている。この変更が何時、何を契機としたのかを国史や正倉院文書などの史料を解析して解明した。結論のみを記すと、天平10年（738）阿倍内親王が立太子したことが契機であり、当初は内親王の乳母であった阿倍氏の一部が「安倍」を名乗るようになった。阿倍内親王の即位（孝謙）などもあり、「安倍」は徐々に広がるが、奈良時代において安倍が阿倍より優勢になることはなかった。

孝謙（重■して称徳）が亡くなったあと20年以上も経過した平安時代に入って安倍で定着するようになる。これは避諱というより、孝謙を思わせる「阿倍」を避けたとみるべきで、尊貴な人物への謙譲という意味合いはなくなっている。

中国から継受した避諱が日本に定着するには少なくとも半世紀はかかる。一般化するとともに、安倍使用は避諱から始まり、定着したのは避諱ではないという展開をみせる。

#### 2. 「八」

数字の「八」は日本人に好まれる数字である。「末広がり」だからという理由であるが、これは後付けである。「末広がり」＝扇であるが、奈良時代以前にはいわゆる扇子はない。檜扇があるが、これは団扇であり、末広がりではない。扇子が一般化する平安時代以降の後付けである。

しかるに、「八」は古代国家のいたるところに存在する。1) いわゆる三種の神器の名称

は「八■鏡」「八尺■曲玉」「天叢雲劍（草薙劍）」である。劍についても、その出所は「八岐大蛇（ヤマタノオロチ）」であり、やはり「八」に関わる。2）古代国家の官僚制の枠組みは二官八省であり、官人の体系・秩序は位階制にあるが位階制は「八」である。統治理念の律令は中国からの導入であるが、その支配の要が中国とは異なる数である。中国では九品になる位階制が日本では一位から八位、そして八位の下に初位がある。すなわち、日本の位階も九等級なのであるが、九番目を「九位」としていない。「八」を意識している制度設計である。3）地方を意味するに「八道」といい、律令制では畿内と七道に区画する。その他、言葉には「八」を冠するものが多い。

八省や八位など、実数としての「8」の場合もあるが、「八■鏡」「八尺■曲玉」など「八」を冠する場合の「八」は実数ではなく、「(非常に) 多くの」という意味であることは、8尺もの巨大な玉があるわけもない。「非常に大きな玉」を意味しているにすぎない。

8は一桁の偶数の最大数であるが、一桁の最大数ならば9を考えるべきであり、別の要因を考える必要がある。西欧風の「聖数」という概念ではない。いまだ確立はしていないが、「8進法」であったという見通しを持っている。継受したが日本風にアレンジしたという評価が妥当であろう。

### 3. 薬

近世に西洋医学の知識が入ってくるまでの前近代日本の医薬は「漢方薬」であり、いうまでもなく中国からの継受である。製法については医書、薬書、本草書などの類で導入は可能であるが、材料にいたっては列島では入手不能なものも多い。これらは中国や朝鮮からの輸入で賄われるが、当然高価となる。継受に限界があるといって過言ではない。

列島で入手可能な薬草の収集方法について検討した。『延喜式』では調、交易雑物の品目として、さらに年料貢雑物として地方から中央に集積される。薬草を採取する現場において、その知識を持った人物が指示しなければならないが国医師がその役にあたった。すなわち、国医師は地方の医療に従事する側面と中央の医療を支える側面があった。